

令和五年度 全日本中学生水の作文コンクール愛媛大会

知事賞

優秀賞

中央審査

入選

「命をつなぐ水」

新居浜市立南中学校

三年

篠原

咲音

しのはら さきね

先日、我が家はトイレのリフォームをした。丸一日、トイレが使えない…。なかなか大変な一日だった。普段、当たり前に使っているトイレ。これには水が大きく関わっている。

人間にとって、水は飲むだけでなく、衛生を保つことにも必要不可欠なものである。料理をするにも、食器や衣類を洗うにも、水を使う。排泄物を流すトイレ、汗にまみれた体を洗う風呂。全てにおいて、水が必要だ。また近年では、感染症予防のために手を洗うことも重要視されるようになった。衛生を保つための水があることで、私たちは生きていけるのだ。そして特に、私が住む日本では、蛇口をひねるとそのまま飲めるようなきれいな水が当然のようにあり、清潔に生活できる環境が整っている。豊かな森林やインフラの整備、発達した下水処理技術によって、私たちの身近には、きれいな水が常にあるのだ。

しかし、このような環境が、決して当たり前ではないことを知った。水について調べてみると、現在、世界ではおよそ十人に一人が、安全な水を手に入れる水源すら無い状況の中で生活している。都市部から離れた村、都市部のスラム、紛争や自然災害によってインフラが破壊された地域などには、給水サービスも行き届きにくく、水を得るのが難しくなっている。特に、西アジアやアフリカの乾燥地帯や発展途上国の水不足は深刻である。このような地域では、飲み水を確保するために、多くの女性や子供が、仕事や勉強の時間を削って水をくみに行っている。しかし、泉や川の水が、泥や動物のふん尿に汚染されると、それを飲んだ人々は病気にかかってしまうのだ。また、少しし

か水を得ることができず、身体を洗えなかったり排泄物を適切に処理できなくなったりすると、生活環境を清潔に保つことができなくなる。健康にも影響が出る。そうなれば、体が小さく免疫力が低い子どもたちは、常に病気の危険にさらされることになる。アフリカの子どもの約十三人に一人が、五歳になる前に命を落としている。私はこの現状を知り、とてもショックを受けた。そして、常に身近にきれいな水があるということが、どれほど恵まれたことなのかということをも、改めて実感した。

世界の水問題を解決するために、私たちにも何かできることは無いか。そう考えてさらに調べてみると、ウォーターエイドという国際NGOの活動について知った。ウォーターエイドは、「すべての人が、すべての場所で、清潔な水と衛生を当たり前に利用できる世界」というビジョンを掲げて、水・衛生分野に特化した活動をしている。寄付やボランティアなどによって、私たちも支援活動に参加できるようだ。また、二〇一五年に国連サミットで採択された「SDGs」の十七個のゴールのうち、六つ目のゴールは、「安全な水とトイレを世界中に」だ。今まさに、全世界が水問題のための取り組みを始めている。

世界の水問題に大きく貢献した日本の先人がいる。中村哲氏―彼は「砂漠を緑に変えた医師」として、アフリカで用水路の建設に生涯を捧げた人物だ。彼が、次に続く私たちの世代へ残した「一隅を照らす」という言葉には、「自分が今いる場所で、自分にできることをいっしょけんめいに…」私はこの作文を書く上で、水についていろいろなことを知った。中でも、厳しい世界の現実に、しっかりと目を向きたい。また、今ある環境を当たり前と思わず、感謝の気持ちを持って生きていきたい。そして、水を大切にするための「今、自分にできること」を、実践していきたい。世界の水問題に命を捧げた先人の思いを、今度は私たちがしっかりとつないでいかなければならないのだ。